



県中いわて

平成30年8月1日 / 第243号

●発行 / 岩手県中学校長会 ●代表 / 佐藤 進 (盛岡市立上田中学校) ●事務局 / 〒020-0885 盛岡市紺屋町2-9 (盛岡市勤労福祉会館2F) / 電話019(622)0572 ●印刷 / 杜陵高速印刷 / 電話019(651)2110

平成30年度 第68回東北地区中学校長会研究協議会山形大会

大会主題「社会を生き抜く力を身に付け、 未来を切り拓く日本人を育てる中学校教育」

今年度の東北地区中学校長会研究協議会山形大会が、「社会を生き抜く力を身に付け、未来を切り拓く日本人を育てる中学校教育」の大会主題のもと、6月28日(木)と29日(金)の2日間にわたり、山形県山形市の山形市民会館と同市内のホテルにおいて開催された。

平成23年度開催予定であった第61回山形大会が、東日本大震災の影響により研究報告「きずな」を配付する紙上発表となってから7年。東北各県から約730名の会員が山形県山形市に参集し、震災からの復興と東北地区中学校教育の一層の充実・発展に向けて、活発な意見交換、情報交流が行われた。

第68回 東北地区中学校長会研究協議会 山形大会

大会主題
「社会を生き抜く力を身に付け、未来を切り拓く日本人を育てる中学校教育」



【開会式で挨拶する阿部会長】

第1日は、開会式と文部科学省行政説明が行われた。開会式で東北地区中学校長会の阿部善和会長は、「学校教育が新たな変革の時期を迎えているなか、東北地区中学校長が互いの実践に学び合うことが、『学校における働き方改革』等の課題の解決や学校経営の改善・充実に結びつくものであり、この2日間の大会をとおり『東北は一つ』という強い絆を改めて確認できる大会としたい。」と挨拶した。

続いて、県教育長(代理：県教委次長)、山形市長並びに全日中会長の3人が祝辞を述べた。

その後、文部科学省大臣官房審議官(初中局担当)

の白間竜一郎氏から、教育再生会議の提言と取組、新学習指導要領、Society 5.0に向けた人材育成、いじめ防止対策の推進に関する調査結果に



【行政説明をする白間審議官】

基づく勧告と対応、学校における働き方改革、運動部活動の在り方の関する総合的なガイドライン、東日本大震災後の修学旅行の状況等についての説明があった。

第2日は、研究協議会(分科会)と記念講演、閉会式が行われた。分科会は、『「社会に開かれた教育課程」の編成・実施』、『地域との連携・協働による「チーム学校の創生』、『多様化・複雑化した学校教育課題に対応できる教員の育成』の研究題のもと、6県から6つの研究が発表され熱心な協議が行われた。

本県からは、地域との連携・協働による「チーム学校の創生」に係り「教職員の専門性を高め、組織力を高める学校経営の在り方～人材育成によるチーム力の向上をめざして～」との発表テーマで、北上市立上野中学校 盛島徹校長が発表し、同市立南中学校 泉澤毅校長が司会を務めた。



【分科会で発表する盛島校長(左)と司会の泉澤校長(右)】

続いて、記念講演は、聖路加国際病院顧問で医師の細谷亮太氏を迎え「いのちの重さ」と題して行われた。小児がん病棟での勤務の経験をもとに、生まれてきたいのちのはかなさと尊さ、そうした環境でも精一杯生きようとしている子供の気高さについて考えさせられるものであった。いのちへの意識が薄れてきている現代社会への警鐘と病気や障がいを抱えた人と一緒に生きる「共生の社会」の実現に向けた熱意あふれる講演であった。

閉会式では、次期開催地の秋田県の石郷岡副会長から、次年度は秋田県秋田市において開催する旨の挨拶があり、来年6月の再会を誓い、2日間の全日程を終了した。

宣 言

今日、我が国の教育は、人格の完成を目指し、伝統と文化を尊重するとともに、豊かな人間関係で満たされている社会を創るたくましい日本人を育成する使命を担っている。

私たちは、教育基本法、学習指導要領等の趣旨を踏まえ、人間尊重の精神に徹し、新しい時代の変化や諸課題にも対応しつつ、確固たる信念と自負をもって全日中教育ビジョンに基づく学校からの教育改革を推進し、「社会を生き抜く力」を育む中学校教育の創造に努めなければならない。

東北地区中学校長会は、中学校教育のさらなる充実を目指して、教育改革の推進と当面する諸課題の解決に努め、東北各県民の信託にこたえていく決意である。

ここに、東北地区中学校長会は、以下の事項を決議し、その実現を期する。

決 議

- 一、人間尊重の精神に徹し、「社会を生き抜く力」を身に付けた生徒の育成に努める。
- 一、全日中教育ビジョンを踏まえ、特色ある教育課程を編成・実施・評価・改善し、「確かな学力」「豊かな心」「健やかな身体」の育成に努める。
- 一、現在の教育課題に即した研修の充実を図り、教職員の資質・能力の向上と使命感の高揚に努める。
- 一、創意ある教育活動を展開し、家庭・地域社会の信頼に応える教育を実現するため、生徒と向き合う時間を確保し、教職員が生き生きと教育活動に専念できるよう、人的措置をはじめとした教育条件の整備・充実を期する。
- 一、「教科書無償給与制度」「義務教育費国庫負担制度」及び「人材確保法」の堅持を求め、教育水準の維持向上を期する。
- 一、東日本大震災及び原発事故による被災地における教育活動の正常化や防災教育等のさらなる充実を努め、継続して東北6県校長会が連携・協力する。

平成30年6月28日 東北地区中学校長会

第1分科会レポート

「社会に開かれた教育課程」の編成・実施

紫波地区 内田 興子（紫波二中）



発表1 「社会に開かれた教育課程」の編成・実施 ～新たな地域連携を通して～

（宮城県東松島市立鳴瀬未来中学校長 伊藤 毅浩）

宮城県教育振興基本計画の重点の一つである「みやぎの志教育」「地域貢献」「防災教育」「コミュニティ・スクール」の4つの視点で8中学校の実践が紹介された。どの学校の実践も、生徒が地域活動を通してコミュニケーション力の大切さを知り、自己有用感を高めることができたことを成果にあげている。学校、保護者、地域、NPO代表者で組織した「協働教育協議会」とNPOや企業との連携の実践では、活動が充実し学校の負担は軽減されたことが発表された。外部人材・外部資源の活用のための校長の働きかけや地域差が教育の質の格差につながらないように校長として学校をリードしていくこと、地域との連携を推進するコーディネーターの育成が課題であることなど大変参考になる内容であった。

発表2 学校や地域の特色を生かした教育課程の編成・実施

（福島県いわき市立三和中学校長 須藤 瑞穂）

「多様な活動を可能にする地域素材」「地域との連携を生かす」の視点で教育課程の編成を研究・実践した2つの中学校の発表であった。9年間を通した「ふるさと教育」を学校経営ビジョンに明示し、校長がリーダーシップを発揮して「ふるさと教育資料」を作成・活用することで教職員の意識を高め、生徒への心の育成につながったこと、地域コーディネーターと連携することで地域人材の積極的活用や実社会に即した学びになったことが報告された。震災で放射能の影響を受けた地域での林業体験や田人復興祭の運営に生徒が参加した実践では、地域の良さを理解できたこと、コミュニケーション力や表現力が向上したこと、他との関わりを大切にしている心情や態度が向上したことが報告され有意義な発表であった。

第2分科会レポート

地域との連携・協働による
「チーム学校の創生」

二戸地区 石橋 和彦（軽米中）



発表1 教職員の専門性を高め、組織力を高める学校経営の在り方
～人材育成によるチーム力の向上をめざして～

（岩手県北上市立上野中学校長 盛島 徹）

経験豊かな人材の教育的財産を次世代へしっかりと継承すべく、今後増加するであろう若手教員の育成のあり方を探り、組織としてのチーム力の充実に図っていくことを目的とした研究であった。いわて型コミュニティスクール構想やまなびフェスト等の岩手県全体の取組の紹介の後、OJTを重点化した実践、WS形式の授業研究会、授業見せ合い週間、校内組織の活性化、副主任制度の導入、再任用教員の活用等々、校内での多様な人材育成の精力的な実践が数多く発表された。スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー等の専門人材との連携・協働による組織力の向上が課題としてあげられ、多くのヒントを与えてくれた発表であった。

発表2 「チーム学校」へつなげる専門性・協調性を高める学校経営を求めて
～ミドルの職能育成と専門スタッフとの協働・連携推進による課題解決～

（山形県山形市立金井中学校長 渋谷 和久）

昨年度も発表した研究の継続であるが、全日中のテーマ変更に伴い、主題・内容等を検討し直したものである。研究のねらいを①専門性を高める（ミドルリーダーの職能育成）、②協調性を高める（ミドルアップダウンが見られる学校運営）、③チーム体制構築（地域・専門スタッフとの連携・協働）の3本柱とした。山形市中学校長会の3つの活動部の数多くの実践に加え、新たに大学教授を講師とし、協働の文化、専門性の発揮、連携と分担をキーワードとした「チーム学校」研修会を開催するなど、学ぶ点の多い貴重な発表であった。

ミドルリーダーが中核となる「チーム学校」の推進は、地域との連携・協働なども包括するこれからの学校の概念であり、その構築は教員の働き方改革などにもつながるものであろう。

第3分科会レポート

多様化・複雑化した学校教育
課題に対応できる教員の育成

一関地方 狩原 雅裕（一関東中）



発表1 質の高い教育を実現する人材育成の推進
～「秋田の探究型授業」の推進による授業改善を通じて～

（秋田県男鹿市立男鹿南中学校長 長谷川 朋欣）

「秋田の探究型授業」（見通し→自分の考え→話し合い→振り返り）を推進することで、人材育成に資する取組の発表であった。小中学校長へのアンケート結果から、(1)学校教育目標の具現化は自校の課題解決が鍵で、教員の資質向上は不可欠。そのために、(2)授業力向上と生徒指導の充実について理解や対応力を身につける研修が必要。(3)効率よい研修を行うには、自校の課題解決に向けて教職員の意識改革が重要。と考察し、これらを「質の高い教育を実現する人材育成」と捉え、「その根幹は校内授業研究会を軸とした授業改善にある」という実践であり、参考となる発表であった。

発表2 「人材育成を通して質の高い教育を目指す
学校経営の在り方」

（青森県十和田市立十和田中学校長 工藤 正彦）

「学び続ける教職員」に向け、教職員の意識啓発を図る上で、校長としてのリーダーシップの在り方を探る取組の発表であった。「教職員から求められるリーダー像」を把握するため、「同僚教職員から学ぶ」観点で校長に対する教職員の受け止め方や願いについてのアンケートを行い、その結果をもとにした校長自らのリーダーシップを振り返るチェックシートが紹介された。

さらに、各校長が「年代別育成事例」を作成して交流したことで、人材育成の「有効な関わり」を見いだせたとの報告があった。校長に対する教職員の受け止め方や願いについては率直な回答が多数あり、重く受け止める必要があるとの発表があり、自らに当てはめると、自らの言動を反省する必要があると感じた。この実践はパワハラ根絶にも繋がるものであり、たいへん参考になった。

先輩メッセージ

『やってみせ、言ってみせて、
聞かせて、させてみて…』

川村 孝一 様

(前盛岡市立仙北中学校長)



初任校の時に担任した教え子たちが、定年退職を祝ってくれました。30数年前、教師駆け出しの若さだけの私でしたが、恩師と呼んでくれる47歳になった教え子たちとの再会は思い出話に花が咲き楽しい一時を過ごさせてもらいました。

あの頃ヤンチャだった子供たちが今では人の親になり、立派な大人になっていることに嬉しさが沸々と込み上げてきました。学級担任として目の前の子供たちと四苦八苦しながらも真正面から向き合っていた若き頃の自分を思い出すことができました。「あんなことやこんなことがあったよね。」と教え子たちに言われ、そんなこともあったなと遠い過去の「若気の至り」が思い出されました。彼らが「今の自分がいるのは、あの頃先生と出会って担任してもらったお陰だよ。」と言われ、恥ずかしながらも嬉しく思いました。

自分の教員人生37年を改めて振り返ってみるとたいしたことはできなかったけれど常に子供たちと一番近いところで共に生きてきたように思っています。歳を重ね、キャリアアップして職名が変わっても常に子供たちと一番近いところで一緒に汗を流し、喜怒哀楽を共にしてきた37年間だったと思っています。

校長は忙しいけれど、子供たちの幸せを願い、全校生徒の学級担任として子供たちを元気にさせ、自分も元気をもらい、任された学校の最高責任者として、チーム学校の監督ではなくキャプテンとして先頭を走らなければ存在価値はないと自分に言い聞かせながら10年間努めてきたつもりです。私が定年まで職を務めきることができたのは、どんな時でも家族の支えがあったからですし、同僚たちの協力があったからであり、本当に感謝しています。

現職の皆さん、子供たちを笑顔にするために、職員を笑顔にし、自分も笑顔でいきましょう。

『…ほめてやらねば、人は動かじ』生徒も職員も。

先輩メッセージ

先人から学ぶ

名須川 淳精 様

(前滝沢市立滝沢南中学校長)



未曾有の災害を被った東日本大震災津波にどう臨むのか？被害の多寡にかかわらず、子供一人一人が震災津波と向き合い、自分自身を見つめ直し、他者や社会との関わりを考えることが重要で、「つらい体験」を「貴重な体験」へと共に歩む復興教育がスタートしています。

二十世紀、日本は明治・大正・昭和の各時代に大きな困難がありました。この困難からの復興を語るうえで「岩手の先人」を忘れてはなりません。

明治時代、大国ロシアを相手にした日露戦争の終結にあたり、両国の仲介斡旋の労をとった米国大統領セルドア・ルーズベルトは、日本からの仲介の申し出を一旦は断りながら、依頼交渉にあたった金子堅太郎から手渡された新渡戸稲造の「武士道」を読み、日本人の精神（心）に感銘を受け、仲介役を引き受けました。新渡戸稲造が明治の困難を救ったと言っても過言ではありません。

大正時代、関東大震災で壊滅的な被害を受けた帝都東京の復興計画をいち早く主導したのは後藤新平でした。当時内務大臣として、大規模な区画整理と公園・幹線道路の整備等に、国家予算の半分近くを費やし震災復興を成し遂げた人物です。

そして、昭和の困難、太平洋戦争の終結は米内光政なくしては語れません。最後の海軍大臣として、ポツダム宣言受諾に反対し、本土決戦を主張する陸軍大臣等を説き伏せ、太平洋戦争を終結へと導くことに成功しました。

今、平成の困難、東日本大震災津波に直面した私たちは、二十世紀の困難に立ち向かった「岩手の先人」、新渡戸稲造、後藤新平、米内光政を最も良く理解できる立場にいます。

過酷な現実と直面しながら勉学や部活動に励む子供たちがいます。両親を亡くしても明るく元気にボランティア活動に励む子供たちがいます。震災のつらい経験を乗り越え、前を向く子供たちは復興の原動力。「岩手の先人」からの学びを生かし、十年後、二十年後の岩手の復興・発展を担い、未来を創造する子供たちを育てることが私たち大人に課せられた使命であると考えます。

先輩メッセージ

「地域と共に」

千枝 徳三 様

(前奥州市立江刺東中学校長)



退職の年に創立40周年の節目の年を迎えましたが、体育館の耐震工事のために、周年行事を一年延ばしました。私の退職後に行われる創立40周年記念行事を、愛する生徒のために、そして教職員や保護者のために、さらには長年に渡り学校にご支援ご協力をいただいていた地域の皆様のために、感動的で喜ばしい周年行事にしたいと、校長としての強い思いがありました。そこで、記念事業として、卒業生が活躍している不来方高校音楽部コンサートを何とか実現できないものか、いろいろと検討、交渉の末、実施できることになりました。ぜひ体育館で日本一の不来方高校の合唱を聴かせたい。これが私の夢であり、退職の置き土産となりました。

今年の6月24日、創立40周年記念事業として不来方高校音楽部コンサートが開催されました。体育館には、保護者や多くの地域の皆様、さらには他地域からも多数の方々が来場され、会場一杯の観客となりました。不来方高校の合唱は、本当に美しく、また、素晴らしいパフォーマンスで、感動で鳥肌が立ちました。このコンサートを聴きながら、合唱の素晴らしさとともに、保護者や地域の皆様と共に記念事業として行えたことに、私は心から喜びを感じました。

私は校長として最後の二年間は、特に地域と共にある学校、地域を愛し地域に貢献する生徒の育成の大切さを非常に痛感し、経営の重点の一つとして取り組みました。職場訪問・職場体験学習等の他に、特に地域ボランティア活動、合唱ボランティア活動等に力を入れて取り組みました。地域の皆様に大変喜ばれました。生徒たちは地域に元気を与える存在であり、地域の確かな担い手となっております。大人になったとき、地域の担い手として一人でも多くの生徒たちが活躍することを願っています。

最後に、現職の校長先生方のご活躍を心からご祈念いたします。

私の学校経営

「真似から学ぶ」

花巻地区 三浦 隆 (宮野目中)



昨年度、新米校長として本校に赴任したばかりの自分に、「私の学校経営」と呼ぶべき実践はない。しかし、多くの先輩方から話を聞いたりして、ぜひ真似てみたいと思って取り組んでいることがいくつかある。それを紹介して、本稿に代えたい。

まず「月目標のキーワード化」。職員会議の提案で、4月は「プライド」7月は「切り替え」10月は「一体感」のように目標を短い言葉で示すことで、先生方に印象付け、目標の共有と意識化を図る。

次に「学校評価の活用」。学期末や年度末に行った学校評価で課題のあった項目から一つか二つを取り上げ、その月に取り組む内容と絡めて改善を促す。学校評価は普段の忙しさゆえ例年通りと流されそうな状況に見直しをかける切り口として効果的である。

校長通信を活用した「モデル事例の提示」も意図的に行っている。研究会や他校視察でよいヒントを得ると、写真とともに職員向けの通信で紹介する。すると説明しなくても先生方が実践を真似するようになる。家庭向けの校報には、行事の記事に加えて普段の授業の様子も紹介する。工夫のある授業を取り上げるので、先生方の励みにもなる。

そして「ワークショップ型職員会議」の実施。校内研で取り入れる学校は多いが、年度末の新年度企画会議でテーマを絞って意見を出し合った。すると、その場ではまとまらなくても、次年度の取組で先生方が工夫するようになる。

並べてみると、どれも小手先の方法論のような気もするが、根底にある願いは、学校の教職員にいきいきとやりがいを持って仕事をしてもらいたいということ。それが、学校全体の活力を生む。そのためには、MVP、Mission、Vision、Passionを先生方に持たせることが肝要と考えて取り組んでいる。

もっとも、この「MVP」理論もある先生の受け売りである。「私の学校経営」の模索はまだまだ続く。

新任校長の抱負

「ニッポンの最終ライン」



宮古地区 石川 健 (田野畑中)

先のサッカーW杯において話題になったのは、日本人サポーターの清掃活動や、選手ロッカーの整頓ぶりだった。試合に勝とうが負けようが、自分達の使用した場所をクリーンアップして立ち去る日本人の姿勢は世界中から称賛された。海外のプレスからは選手にもその質問が飛び、あるディフェンダーは「来たときよりも美しく」という言葉を引き合いに出してその疑問に答えていた。

そういえば数年前には、横断歩道を渡り終えた小学生が、止まってくれた車の運転手にお礼のお辞儀をする姿が、やはり海外の人に感動を持って受け止められた。かの東日本大震災では、支援物資を受け取る被災者の方々の行列を乱さぬ冷静な態度に、感嘆の声が上がった。

このような日本人の礼儀正しさや公德心の高さは、巡り巡ってインバウンド効果となって現れている。海外から訪れる観光客は、観光資源もさることながら、心地よい接待や衛生的な環境に心酔し、二度、三度と再訪してくれる。今や日本という国の切り札となりつつあるのだ。

個の時代と言われ、多様な価値観が容認されるようになり、学校教育も従来の体裁を維持することが困難になってきた。生徒指導で「太刀先の見切り」を誤れば、行き過ぎた指導と非難されることにもなりかねず、私達は生徒の成長機会を目の前にして呻吟することも多々ある。しかし、先に挙げた例を引くまでもなく、日本人としての基盤を守り育ててきたのは、義務教育に他ならない。首都圏だろうが三級僻地だろうが、どんな生徒に対しても等質な教育を施してきたのは、私達なのだという誇りを持ちたい。私達が時代の趨勢に道を譲ってしまえば、日本は切り札を失いかねないだろう。

だから踏みとどまらねばならない。私達がニッポンの最終ラインなのだから。

新任校長の抱負

理想をかたちに



久慈地区 松本 隆 (宇部中)

面接考査のときに「どのような学校経営をしたいと思いますか」と問われ「すべての生徒が、この学校で学べて良かったと思える学校が理想です」と予定外を答えてしまい「大きく出てしまった」と動揺。

そのような私が着任した宇部中学校は、全校生徒29名、久慈市とはいえ田畑や林に囲まれた高台にある学校です。すぐ近くでは、三陸沿岸道路の工事が盛んに行われています。

新任式で「宇部中学校は全校生徒29名ですが、その分、団結力はどこにも負けません」と生徒代表の言葉がありました。実際、その言葉通り学校生活は学年の枠を超え全校体制が当たり前。給食当番や清掃は縦割り班。同じ釜の飯を食うではありませんが、ランチルームで全員一緒に給食を食べます。

着任してから、かつての芳しくない学校の様子をPTAのOBや地域の方から伺う機会がありましたが、今、目の前にいる生徒たちは、明るく素直で授業での発言も積極的です。

4月は「このような学校に勤務でき、自分は恵まれているなあ」と感じるとともに、自分の役割は何か？と自問する毎日でした。そのときふと思い出したのが面接の場面。そして「大きく出てしまった」かもしれないが、決して心にもないことを答えたわけではないよなと思いました。

幸い、チーム宇部中には、個々の生徒の特長を把握し、生徒としっかり向き合う指導に長けた教職員が揃っています。それゆえ、生徒ごとのオーダーメイドの指導が可能だと気づきました。生徒一人一人に応じて個性や学力、人間としての力を伸長する。結果として「この学校で学べて良かった」とすべての生徒が思える学校になるのではないかと考えます。そのためには、教職員が持てる力を十分発揮し、生徒と向き合える環境を整えること。これが私の役割なのだと感じています。

また、大きく出てしまったかもしれない…。